お飾りの妻のはずが、
冷徹宰相様（元ストーカー）に
毎夜淫らに愛されています

第一章　人生の転機

バシャッ！　とフラッシュの大きな音が響く。
瞬間的に目をつむってしまうのは仕方ないとして、笑顔とポーズはかろうじて保ったまま、モニカは「あいかわらず、すごい光」とつぶやいた。
「――はい、お疲れ様！　今日もいい感じだったわよ、モニカ」
少し時間を置いて、分厚いカーテンをシャッと開いて入ってきたのは、この店の女性店主だ。
四角い写真機の背後に伸びる黒い布から写真家が出てきて、その隣に陣取っていた画家も筆を止める。四人はそれぞれ「お疲れ様でした」と頭を下げ合い、帰り支度に入った。
「写真を撮られるのにも慣れてきたかしら、モニカ？」
着替えが終わり、試着室から出てきたモニカに女性店主が尋ねてくる。
「そうですね。長い時間、同じポーズを保っていないといけないのは、絵に描いてもらうときと同じですし。フラッシュ、でしたか？　あのピカッと光るのだけは慣れないですけど」
「すごい光だもんね～。あたしもアレは身体に悪くないかと心配になるよ」
と言いつつ、自分の手がけるドレスが少しでも多くのひとの目にふれるようにと、写真という最

新の技術を取り入れたのはこの店主だ。
　白黒の写真でドレスの正確な形を伝え、画家が描いた絵で色を伝える。そんな二つの手法を使ってまでドレスを市場に売り込もうとするのだから、本当にやり手のご店主だ――と、ドレスを返しながらモニカは苦笑した。
「で、これが今回のモデル料ね。写真のぶんも入っているから」
「――えっ？　こんなにたくさん？」
　渡された巾着には、いつもの倍のモデル料が入っていた。
「いただいちゃっていいんですか？」
「ああ、いいの、いいの。もらってって。というか、あんたに渡すように言われてて――」
「えっ、どなたに？」
　きょとんと首を傾げるモニカに対し、女性店主は「しまった」という顔をして口を覆った。
「えーっと。今のは聞かなかったことにしておくれ。とにかく、金はあって困るもんじゃないだろ？　ほら、早く帰った帰った」
「はぁ」
　釈然としない気持ちを抱えつつ、常に入り用なのは間違いないので、モニカはありがたく巾着を鞄にしまい込んだ。
「モニカちゃん、今日もよかったよ」
「ありがとうございます。また次もよろしくお願いします」

　馴染みの画家にそう挨拶して、日が傾き始めた道をモニカは急いで歩き出した。
「せっかくたくさんのお給金をいただいたわけだし、お肉でも買って帰りましょうか」
　たたき売りを始めた市場へ飛び込み、思い切って鶏肉を買い込む。
　買い物中も、街中を突っ切って歩くあいだも、多くのひとがモニカに声をかけてくれた。
「おや、モニカお嬢様！　今日は街で仕事だったのかい？」
「ええ、モデルのお仕事だったの。写真も一緒に雑誌に掲載されるから、是非見てくださいね」
「女向けのファッション誌なんて男は読まねぇよ！　ガハハ！」
「あら、それじゃあ代わりに新しいお仕事を紹介してくださいな」
「おうよ！　明日は地引き網の修理があるんだよ。頼めるか？」
「まぁ、嬉しい。いつもの浜辺ですよね？　必ず行きますね」
　上手いこと明日の仕事にもありつけた。定職に就けないモニカにとって、単発の仕事に日を空けずに入れるのはありがたいことだ。
　そうこうしているうちに街の外れへ出てくる。モニカが帰る先は、海に面した崖の上に立つ、そこそこ大きな屋敷だった。
「――ただいま！　可愛い子どもたち」
　玄関を開くと同時に声をかけると、彼女の帰りを待ちわびていた子どもたちが奥からわっと飛び出してきた。
「モニカ・ママ、おかえりなさ～い！」

「お腹空いたー！」
走り寄ってきた子どもたちはざっと十人ほど。ほとんどが五歳以下の幼い子どもたちだ。そのあとから出てきたのは、彼らを世話する十歳前後の子どもたちである。
「今日は早かったのね、モニカ・ママ」
「ええ。それにお給金をたくさんいただけたから、鶏肉を買ってこられたわ。今日はこれでシチューを作りましょうね」
「わぁ、お肉だぁ！」
嬉しそうな子どもたちに「もうちょっと待っていてね」とほほ笑みかけ、半地下の厨房へ向かう。そこでは食事当番である年長の子どもたちが、すでに下ごしらえを始めていた。
「おかえり、モニカ・ママ。――わぁ、お肉だわ！」
食べ盛りの子どもたちにとって肉は大切な栄養源だ。滅多にありつけないだけに、全員が笑顔で駆け寄ってくる。
長い金髪をひとまとめにしたモニカは、「さっそくご飯を作りましょうか」と声をかけた。だが肉を切り出したところで、何人かの子どもたちが「お客さんが来てるよ！」とドタバタと報せにやってくる。
そろそろ日も落ちる時間にお客様？　と、モニカは年長の子どもたちと顔を見合わせた。
「なんかぁ、モニカ・ママの実家のひとだって」
報せにやってきた子どもたちの言葉に、モニカはわずかに眉を寄せた。

「モニカ・ママ、なにかよくない報せかな？　あたしたち、とうとうここを追い出されるんじゃ……」
子どもたちの中でも一番の年長者が不安そうな声でつぶやく。モニカは視線だけで黙っているように告げて、幼い子どもたちににっこりほほ笑んだ。
「報せてくれてありがとう。すぐに行くわね」
そうして半地下から一階の玄関ホールに向かうと、しかめっ面を隠しもせずに立っている初老の男を見つけた。男のほうもモニカに気づいて殷懃（いんぎん）に腰を折ってくる。
「モニカお嬢様、お元気そうでなによりです。旦那様からのご命令で、すぐに屋敷を訪ねるようにとのことです」
馬車の用意もありますので、とすぐさま連れて行こうとする男の手を、モニカは振り払った。
「あいにくと食事の支度があります。ここには三十人もの子どもがいるのですよ？　彼らに夕食を与えさせず、わたしだけ連れて行こうなんて。そんなことは許しません」
「許す、許さないではなく、旦那様がお待ちで――」
「あらまぁ、お腹が空いた子どもたちの暴れ具合をご存じないのね？　育ち盛りの子どもにご飯を与えず大人がどこかに行くなんて、あり得ないわ」
「そんなことはどうでもい――」
「わたしにとってはどうでもいいことではありません。叔父様のところには向かいましょう。ですがそれは、子どもたちを満腹にしたあとで、です。……少しでも早くその時間になってほしければ、

厨房に来て食事の支度を手伝ってくださいな」
　厨房へ続く通路を示しながら言えば、男は顔を真っ赤にして怒鳴ってくる。
「この小娘がっ。ひとが下手に出ればいい気になって――」
「はいはい。じゃ、そこで待っていてくださいな。ここサイヨン記念孤児院では、子どもたちが最優先ですので」
　モニカはさっさと踵を返して厨房に戻る。男がまだ怒鳴っているのが聞こえたが、綺麗に無視した。
（それにしても叔父様から呼び出しなんて。きっとろくなことではないのでしょうけど）
　鶏肉を肉包丁でダンダンと切り分けながら、モニカは内心で首をひねる。
　ようやっとシチューができあがり、食堂のテーブルに並べた頃、また玄関のあたりが騒がしくなった。
「みんな先に食べていてね！　わたしはお客様とお話ししてくるから」
　食堂に集まった子どもたちにそう言い置くと、さっさと出てこい！　という怒鳴り声が響く玄関に向かう。
　そこにはあの初老の男だけではなく、久々に見る叔父夫婦がカンカンに怒った顔で立っていた。
「こ、この馬鹿娘！　我々からの呼び出しを無視するとは、なにごとか⁉」
　地団駄を踏みながらそう主張する小男が、モニカの叔父であり現ステイレン伯爵だ。
「呼ばれたらすぐに来るのが当然でしょう⁉　まったく、小汚い孤児どもと暮らしているから常識までおかしくなっちまったのかしらね⁉」
　とキーキー声で喚くのが叔母である伯爵夫人。
　最初に屋敷にやってきて、今は叔父夫婦の背後で「まったくです」と頷いている初老の男は、彼らの屋敷の執事である。
　それぞれにモニカの非を主張する彼らに、モニカは頬に手を当てて「あらまぁ」と首を傾げた。
「叔母様の口から『常識』という言葉が出てくるなんて！　わたしの両親が馬車の事故で亡くなった直後に屋敷に押しかけ、爵位も財産も屋敷も根こそぎ奪っていったのはどちら様でしたかしら？　養育すべき姪を、伯爵家が運営していた孤児院に追いやっておいて、よくそんなことを言えたものですわね。感動してしまいますわ」
　おっとりした面持ちでバッサリ言い切ったモニカに、叔父夫婦がぽかんと口を開けて動きを止める。モニカは「で、なんの御用ですか？」と笑顔を向けた。
「わたしの結婚相手が決まったとか、そういう感じですか？　以前から申し上げている通り、わたしはここにいる孤児三十人をしっかり養育してくださる方でなければ結婚いたしませんよ」
　すると叔父はハッと我に返ったようで、「そ、そうだ！」と大声を出した。
「まさにその通り！　おまえに素晴らしい結婚相手を用意したぞ！　なんとラガン商会の会長さんだ！　今こちらにいらしている」
「えっ？　こちらに？」
　すると、叔父の紹介を待っていたように、開け放したままだった玄関扉の向こうで、停車してい

た馬車がわずかに揺れる。御者が開いた扉から出てきたのは、身なりのいい紳士だった。
「――ごきげんよう、ステイレン伯爵家のお嬢さん。ほう、ファッション雑誌の写真で見るよりずっと美しいではありませんか」
どうやらモニカの姿を雑誌で知っていたらしい。一方のモニカは、思わずぽかんと口を開けた。
「……叔父様、この方が本当にわたしの結婚相手ですか？　この方、わたしより……いえ、叔父様よりも、ずいぶん年上に見受けられますが」
おそらく五十代、若くても四十代後半くらいだろう。髪は白髪交じりだし皺も多い。幸い身体つきは叔父より健康そうではあるけれど。
「冗談なものか。そもそも貴族の結婚において年齢差はたいした問題ではない！」
叔父は堂々と言い返す。モニカは「よくありません」とぴしゃりと言った。
「年齢差はとにかくとして、事前連絡もなくいきなり『結婚相手だ』と連れてこられて、はいそうですかと言えるわけがありませんわ」
モニカは近づいてきた紳士に丁重に頭を下げた。
「申し訳ありませんが、わたしには養育すべき三十人の孤児がおります。ここサイヨン記念孤児院は亡き両親が始めた施設で、子どもたちは創設時より、この場所を我が家として生きてまいりました。今となってはわたしが唯一残った職員ですから、この場所を離れるわけにはいかないのです」
だからごめんなさい、と断るが、商会の会長だという紳士は朗らかに笑いながら拍手を響かせた。
「なんと。慈善意識が高くて素晴らしいことですね。安心してください。わたしはあなたが嫁いできたのちの孤児たちの待遇をしっかり考えていますからね」
「それは本当ですか？」
いぶかしむモニカに、商人はにっこりと笑顔で請け合った。
「ええ。最近は子どもが高く売れると評判なのです。あ、もちろん国内の話ではありませんよ。わたしは仕事柄、海外にも伝手を持っておりますので、子どもたちの引取先はいろいろと知っているのです」
ピシッ、とモニカの全身が硬直する。どのあたりに安心できる要素があるのか、問いただしたい思いだ。
（というより、この方自身もまっとうな商売をされていないのではないかしら？）
まっとうな商人が子どもを売り飛ばそうとするはずがない。この男とは結婚どころか、関わるのも危険だとモニカは直感した。
「そういうわけで、モニカ嬢、結婚式はいつにしましょうか。こちらとしては明日にでも結婚証書を取り寄せてもいいくらいですが」
ニコニコと笑う商人の言葉に、モニカは憤然として拳を握りしめた。
「子どもを国外へ売り飛ばそうとする方と結婚なんてあり得ません。お引き取りください」
「おやおや、そんなことになったら、君の叔父夫婦は路頭に迷うことになりますな。わたしが貸した金を返せないわけですからね」
「！」

叔父夫婦を振り返ると、叔父はさっと視線を外し、叔母は逆ににらみ返してきた。
「おまえのせいだよ、モニカ！　おまえがこんなおんぼろな孤児院など運営するから、伯爵家は家計が火の車になっているんだよ！」
「そんなはずはないわ。あなた方はこの孤児院に一銭たりとも入れていないでしょう。ここの運営費と子どもたちの生活費は、すべてわたしが稼いでいるんです」
無論、モニカ一人の力では限界があって、最近は年長の子たちに小物作りや日雇いの大工仕事などを頼んでいる。が、カツカツなのは間違いない。
一方の叔父夫婦は派手派手しい格好をしている。叔母なんて、首にも耳にも手首にもじゃらじゃらと宝石を連ねていた。それを売り払うだけで借りた金は返せるのでは？　と、モニカはジトッとした目を叔母に向けた。
「んまっ！　なんて目でこっちを見るんだい」
「借金を帳消しにするために、姪を売り払おうとする叔母に向ける目として、これ以上なく正しいと思いますけど」
「キーッ！　あいかわらず生意気な」
手にした扇を握りつぶす勢いの叔母とのやりとりに、叔父が「まぁまぁ」と割って入る。
「なにを言ったところで、もう会長さんとは『モニカを嫁がせることで借金を相殺する』という契約書を交わしたわけだし。問題ないよ」
「わたしからすれば大ありです！　というか、叔父様、わたしがこの商人の方と結婚することがどういうことか、おわかりになっています？　由緒あるステイレン伯爵家を、この方に売り渡すことと同じなのですよ？」
モニカの指摘に、叔父は「へっ？」と目を丸くする。
「なにを言っているんだ、モニカ。おまえと商人が結婚したからといって、この伯爵家は今後も変わらず当主であるわしのものだ！　そ、そうですよね？」
堂々と宣言しながらすぐに商人に確認を入れたのは、叔父の胸にも「もしや」という思いがよぎったからであろう。
商人は「ええ、もちろんですとも」と再び朗らかな笑みを浮かべた。
「ステイレン伯爵は間違いなくあなたですよ、ボブ殿。まぁ確かに、お嬢さんと結婚したらわたしは伯爵家に婿入りすることにはなりますが」
「は、ははは、そ、そうですよね！　あはははは……」
額に汗をかきながら笑う叔父に、モニカは特大のため息をついた。
「その方に借金をしているということは、伯爵家には財産らしい財産はもうないということですよね、叔父様？　それは今後、伯爵家がなにかしようとするたびに、婿殿にお金を融通してもらうことを意味します」
「む？　まぁ、そうなるな？」
「お金を借りる側がお金を貸す側の上に立ち続ける、なんてことができると思うのですか？」
モニカのあきれた問いに、叔父はぽかんと口を開けて目を瞬かせた。

「……なにを馬鹿なことを言うんだ、モニカ。わしはステイレン伯爵だぞ！　商人より偉いに決まっているだろう！」

エッヘンと胸を張って堂々と言ってのける叔父に、モニカはその場に崩れ落ちたくなった。

「……なるほど。こんな叔父の懐に入ることなど、やり手の商人からしたら簡単すぎたわね」

小さなつぶやきだったが、横にいた商人には聞こえたらしい。彼は面白そうにニヤリと笑いかけてきた。

「伯爵のおつむはどうしようもないが、どうやら姪のあなたは賢いようだ」

「お褒めいただいたところで、わたしはあなたと結婚するつもりはございません」

「ですが、すでに契約書を交わしてしまいました。あなたに逃げ場はありませんよ、モニカ嬢」

モニカはキッと商人をにらみつけた。

「その契約書とやらを見せてください。街の弁護士に見てもらいます」

「抜け穴を探すつもりですか？　無駄なことです」

「そうだとしても納得できませんもの。わたしのことはとにかく、子どもたちに危害を加えさせるわけにはいきません」

しかしモニカがかたくなになればなるほど、商人は楽しげにニヤニヤするばかりだ。

「その強気がいつまで保つか見物ですね。――とにかく、今日はこの屋敷を差し押さえます」

「はっ……!?」

大きく目を見張るモニカの前で、商人はゆったりと玄関ホールを見回した。

「そこそこ大きな屋敷だ。海に面していて景観もいいでしょう。子ども向けの造りになっているのを修繕すれば充分使えますから」

「なにを勝手に……！　ここはわたしの亡父が建てた孤児院です」

「今はわたしのものです。この屋敷もとっくに抵当に入っていますから」

借用書か契約書かわからないが、なにかの書類を懐から出してひらひらとちらつかされて、モニカは思わず手を伸ばす。

「見せてください！　確認するまで勝手なことはさせな――」

そのときだ。奥から複数の足音が聞こえてきた。

「モニカ・ママ～？　まだご飯食べないの？　もうみんな食べ終わって……」

呼びにきた子どもの声は、ひゅっと喉の奥に消える。見知らぬ大人たちが玄関ホールで揉み合っているのだ。モニカも書類に手を伸ばしたままの格好で固まってしまった。

「モ、モニカ・ママ？　なにがあったの――？」

「……食堂に戻っていて！」

モニカはとっさに声を上げるが、その隙に書類はさっと隠されてしまった。

「おお、孤児にしては健康そうな子どもだ。これは高く売れるでしょう。――おまえたち、子どもたちを連れていけ」

それまでひとのよい笑みを浮かべていた商人が、さっと背後に指示を出す。それと同時に、馬車から屈強な男が三人も出てきて、すぐに奥へ向かおうとした。

「待って！　子どもたちになにをする気――」
止めようとしたモニカの腕を、商人ががっちり捕まえる。
「あなたはご両親が亡くなってから二年も、叔父の援助を受けずに孤児たちの面倒を見ていたのでしょう？　もういいではありませんか、しなくてもいい苦労をすることは。今日からはわたしの妻として、のんびり過ごせばいい」
モニカは必死にもがくが、叔父夫婦まで一緒になって押さえてくる。
「モニカ、いい加減に聞き入れろ！　伯爵家の将来はおまえの結婚にかかっているんだ！」
「伯爵家のために金持ちの商人と結婚できるなんて、幸せだろう!?」
いったいどこが幸せだというのだ。こんな金食い虫どもに、孤児院の建物も子どもたちも奪われるなんて悪夢でしかない。
「離して！　離してよ！」
「――うわっ、いたたたっ！」
モニカは首に巻き付いてきた叔父の腕にとっさに噛みついた。
悲鳴を上げた叔父が、近くにいた叔母も巻き込んで後ずさる。モニカはすぐに二人から距離を取るが、背後から容赦なく蹴りを入れられた。
「きゃあ！」
固い玄関ホールの床に倒れ込んだモニカを、商人が上から足で押さえてくる。
「いっ……！」

「やれやれ、しとやかな見た目をしてとんだ暴れ馬だ。おとなしくしていなさい」
靴の裏でグリグリと背中を踏みつけられ、抜け出そうにも抜け出せない。
そうこうするうちに食堂のほうから子どもたちの悲鳴が聞こえて、モニカは絶望に目の前が真っ暗になる。
「子どもたちに手を出さないで――！」
必死の思いで叫んだときだ。今度は玄関の外が騒がしくなり、ガチャガチャという金属音が響き渡った。
「――全員動くな！　王国騎士による監査である！　その場に留まれぇ！」
玄関扉がそれまで以上に大きく開かれ、甲冑姿の騎士たちが雪崩を打って入ってきた。モニカのみならず商人も叔父夫婦も仰天する。
監査と言われぎょっとしたモニカだが、子どもたちが危機に陥っているのだ、今はとにかく助けてもらいたい。モニカは声を張り上げた。
「騎士様方！　奥の食堂で子どもたちが連れ去られそうになっております！　どうかお助けを……！」
商人はぎょっと目を見張り、モニカの髪を乱暴に引っ張った。
「このっ、悪あがきを」
「きゃあっ！」
頭皮に走る痛みで目に涙が浮いたときだ。

ビュッ！　とモニカの頭上をなにかが通り過ぎ、次の瞬間には痛そうな音と「ぎゃ！」という悲鳴が響いた。

「――彼女にさわるな、悪徳商人が」

地を這うような低い声が聞こえてきて、両手を床につき上体を起こしたモニカはハッと顔を上げる。

そこには甲冑姿ではなく、カチッとした上下を着込んだ背の高い青年が立っていた。彼は落ちてきた銀縁の眼鏡を指先で持ち上げると、振り上げていた長い足をすぐに下ろす。

「大丈夫ですか、ご令嬢」

彼は仰向けに倒れた商人を背後に雑に蹴っ飛ばし、モニカに手を差し伸べてくる。

呆然としたモニカだが、彼がずっと手を差し伸べたままでいるので、おずおずとその手に自分の手を重ねた。

「ええと、はい、なんとか。あの」

モニカはちらっと商人に目をやる。いったいどれほど強く蹴られたのか、商人は白目を剥いて床に伸びていた。

「……死んでないですよね？」

「顎を蹴り上げたので脳しんとうを起こしているだけかと。……別に死んでもかまいませんが」

ぼそっと付け足された言葉は聞かなかったことにしよう。モニカはひとまず「ありがとうございました」と頭を下げた。

「助けていただいて……」

「か弱い令嬢に暴力を振るうなど、どんな理由があっても許されませんから」

そうこうするうち、奥から子どもたちがわっと飛び出してきてモニカに纏わり付いた。

「うわぁん、モニカ・ママぁぁ……！」

「みんな！　よかった、無事ね!?」

小さい子はもちろん、年長の子どもたちも泣きそうになっているから、そうとう怖かったことだろう。

「おれたちは大丈夫。あの黒服たちに引っ張って行かれそうになったところを、騎士様たちが助けてくれたんだ」

あの黒服、と年長の子が指さした先には、騎士たちに後ろ手に縛られた商人の部下たちがいる。

彼らは「離せ！」「なにすんだ！」と喚きながら、騎士たちに外へ引きずられていった。

騎士たちに押さえつけられているのは彼らだけではない。叔父夫婦もいつの間にやら騎士たちに拘束されている。

「な、な、なんであたしたちがこんな目に遭うんだい!?」

「いったいなんのつもりだ、わしはステイレン伯爵だぞ!?」

口々に喚く叔父夫婦に、眼鏡の青年は「ああ、そうでした」となにか思い出したように懐に手を入れる。

そこから出てきたのは、一枚の書状だ。

「ボブ・ステイレン伯爵。あなたは領地内にある隣国アフィロとの関所を通過する者に、法外な値段の通行料金を請求したり、出店許可証を売りつけた容疑があり、実態を調べるための監査許可が出ていました。そのために赴いたのですが、なにやらここの孤児たちを連れ去ろうとした様子でもある。取り調べのため、速やかに拘置所に移っていただきます」

「こ――」

「拘置所!?」

叔父と叔母が揃って目を剥く。モニカも大きく目を見開いた。

「えっ、アフィロとの関所でそんなことが……？　確かにここ最近、アフィロからの商人たちを街で見かけないなとは思っていたけれど」

呆然としながらつぶやくと、眼鏡の青年は「その通り」と頷いた。

「その実態を調べるためにこうしてやってきたわけですが、いやはや、誘拐と暴行の現場に居合わすとは。運がよいのか悪いのかわかりませんね」

「はぁ」

「とにかく全員、護送用の馬車に運んでください」

眼鏡の青年は騎士たちにテキパキと指示する。

子どもたちをなだめたり、叔父夫婦を見張ったりしていた騎士たちは即座に「はっ！」と敬礼した。

「モニカ・ママ、このお屋敷、出て行かないといけないの？」

バタバタと屋敷内が慌ただしくなる中、モニカに抱きついていた年少の子が震える声で問いかけてきた。

きっと商人の部下たちが「もうこの屋敷はおまえたちのものじゃない」とか、よけいなことを言ったのだろう。モニカは、子どもたちになんてことをと腹を立てる傍ら、商人がちらつかせていた書類は本物だろうかと不安になる。

だが、今は子どもたちを安心させなければ。モニカは「大丈夫よ」とにっこりほほ笑んだ。

「もしそうなったとしても、別の居場所をちゃんと見つけるから。街のひとに協力してもらって、寝る場所と働く場所を確保してもらうとか――」

そのとき、背後から「んんっ」とわざとらしい咳払(せきばら)いが聞こえてきた。

「あ、失礼しました」

眼鏡の青年のことを忘れかけていたモニカは慌てて振り返る。だが。

「いっ！」

と思わず声が出るほど、鋭い痛みが腰から膝へと走り、危うく倒れそうになった。

「おっと」

眼鏡の青年がすかさず両腕を伸ばし、モニカを抱き留めてくれる。

その腕のたくましさと胸板の厚さに、モニカは「ひゃわ」と妙な声を出してしまった。

「す、すいませんっ」

若い男性に抱きしめられるのが初めてとあって、謝る声も上擦ってしまう。

一方の青年は、「いいえ」と落ち着いた面持ちで頷いていた。
「それより、足を怪我しているのでは？　ここは少し暗いのでわかりづらいのですが」
「ええ……？」
そうだとしたら厄介だ。怪我をした状態で子どもを三十人見るのは、あまりに難しい。
いつの間にか日はすっかり落ちて、窓から入る西日も頼りないものになっている。このまま夜を過ごすと思うと不安は大きくなるばかりだ。
（監査許可が出ていた叔父様たちは、拘置所でしばらく取り調べを受けるとして。あの商人のほうは、どれくらい引き留められるものかしら……？）
モニカに暴行を加えた上、部下を使って子どもたちを誘拐しようとしたのだから、それなりに事情聴取などがあると思うが……保釈金を払えばすぐに出てこられる、くらいの判断に落ち着けば、今日明日にも解放される可能性がある。
――そして今回、このような形で捕まったからには、今度はもっと慎重に誘拐を実行しようとするだろう。ああいう輩は、一度失敗したくらいで諦めるはずがないのだから。
なんとも頭が痛い……これからどうしよう……と、思わず頭を抱えたときだ。
モニカをジッと見下ろしていた青年が不意に口を開いた。
「よろしければ、我々の駐屯地にご案内します。ご令嬢だけでなく、子どもたち全員を」
予想外の申し出に、モニカは大きく目を見開いた。
「えっ。ですが――」

「ちょっと失礼」
青年は一度身をかがめると、モニカの膝裏と背中に手を当てて、彼女をひょいっと横向きに抱え上げた。
「わぁっ」
身体が突然宙に浮いて、モニカはとっさに彼の首筋に抱きつく。女の子たちが「きゃあっ」と黄色い声を上げるのが聞こえて、思わず顔が熱くなった。
「あ、あの、いきなりなにを――」
「暴れないで、そのままでいてください。――さて、孤児院の皆さん。あなた方のママは足を怪我しているので、治療のため街へ連れて行きます。あなたたちも一緒に連れて行きたいのですが、いかがでしょうか？」
青年の問いにモニカはぎょっとするが、子どもたちは「街に行くの？」とすぐに反応する。
「モニカ・ママと離れるの、やだぁ……！」
おまけに小さい子どもたちが泣き出したので、「決まりですね」と青年は頷いた。
「今、こちらに馬車を寄せますので、皆さんはそちらに乗ってくださいね」
青年が言った途端に、大型の馬車がぞろぞろと孤児院の前に入ってきた。
（こんな大きさの馬車……おいそれと用意できるものではないわ。叔父様のところに監査に入ると決めたときには、もうわたしたちを連れ出そうと考えていたの？）
いったい、この眼鏡の青年は何者なのだろう？　王宮で働く役人……にしては、堂々としている

気がするし。

まじまじと彼を見つめると、視線に気づいた青年は軽く肩をすくめて見せた。

「安心してください。道中の安全は騎士たちがしっかり守ります。寝床も人数ぶん用意してありますから、大船に乗ったつもりで過ごしてください」

「はぁ、あの、ありがたいのですが、あなたはいったい……？」

「おや、そういえば名乗っていませんでした」

青年自身、今それに気づいたと言わんばかりに眉を上げて、モニカをまっすぐ見つめてきた。

「初めまして、わたしはユリシス・オーディオル。このバフィロー王国にて、宰相を務めております。以後お見知りおきを」

「……」

パチパチと目を瞬かせモニカは、数呼吸置いたのち、こぼれんばかりに目を見開く。

「――さっ、宰相閣下ぁ……!?」

素っ頓狂なモニカの声に、宰相と名乗った青年ユリシスは動じることなく「では我々も移動しましょう」と言って、自分が乗ってきた馬車に彼女を抱えて乗り込んでいくのであった。

＊　＊

モニカの足の怪我はわりと深刻だった。最初に蹴飛ばされたときにひねったのか、右足首は捻挫して赤黒く腫れ上がっている。捻挫しているのは足首なのに、膝から腰にかけても違和感が大きく、支えなしで歩くのは困難だった。

「あまり痛みは感じないのですけど……」

「突然の事態に興奮状態にあるからでしょう。落ち着けばたぶん痛みが出始めます」

「それはありがたくない診断ですね」

ユリシスの淡々とした言葉に、モニカは大きくため息をついた。

診察と手当てをしてくれた医師が帰っていくと、彼は駐屯地の女性職員を呼んで、モニカの着替えを手伝うように命じる。

着替えが終わると同時に彼はモニカのいる部屋に帰ってきて、「お腹が空いたでしょう」とスープとパンを差し出してきた。

「まぁ、ありがとうございます」

「足以外にも、手や腕なども擦り剥いていますし、しばらく療養してください。捻挫が治るまでは外出しないほうがいいでしょう」

手近なスツールに腰掛けた彼は、長い足を持て余すように何度か組み直す。

ありがたくスープをいただきながら、モニカはさりげなく彼のことを観察した。

（孤児院は薄暗かったから、眼鏡をかけている背が高いひと、というくらいしかわからなかったけれど）

明るいランプの下で見る彼は、思わずハッと二度見してしまうほどの格好良さだ。

すっと通った鼻筋に、長い睫毛が彩る両目。その色は冴え渡った青だ。わずかに目にかかる髪は真っ黒。艶やかでなにもしなくても輝いて見える。

体格は、服の仕立てによってそう見えるのか、痩せているように見えるけれど、抱き留められたときの胸板は結構厚かったと思う。腕もがっしりしていてたくましかった。

（って、なにを恥ずかしいことを考えているの）

異性の胸板やら腕やら、おおよそ淑女が思いを馳せるところではないわと、モニカは慌ててユリシスから視線をもぎ離した。

とにかく、総じて素敵な殿方であることは間違いない。銀縁の四角い眼鏡も、普通は野暮ったいと思われそうなのに、彼には恐ろしく似合っているから驚くべきことだ。

その彼は食事中のこちらを気遣ってか、窓辺に置かれた書き物机に向かっている。なにやら書類を書き付けている様子だ。

ちょうどモニカが食べ終わる頃、彼も書類を書き終えたらしい。絶妙なタイミングで使用人らしき男性がやってきて、空になった食器と書類を抱えて出て行った。

「――さて、少しは落ち着きましたか」

「あ、はい。ごちそうさまでした」

「質素な食事で申し訳ない」

彼はそう言うが、たくさんの野菜とお肉が入って、しっかりとブイヨンを利かせたスープは頬が落ちそうなほどに美味しかった。パンには柔らかいバターも付いていたし。ここでの普通の食事だというから、騎士たちはなかなか良好な食生活を送っているのだろうと想像が付いた。

――ここは王国騎士団の駐屯地の一つだ。建物はいくつかあり、モニカがユリシスに抱えられて入った部屋は、客人用の棟の一等室だった。

子どもたちも同じ建物内にいるようだ。先ほどから笑い声やはしゃいだ声が聞こえてくる。

このあと年長者と年少者を組み合わせてグループに分けて、各部屋に泊まらせる予定だという。今は駐在の女性職員や騎士たちが、子どもたちを交代で風呂に入れてくれているようだ。至れり尽くせりの待遇である。

「とても美味しかったです。食事だけでなくお医者様も呼んでいただいて……子どもたちも保護してくださり、感謝の言葉もありません。本当にありがとうございます」

モニカが丁寧に頭を下げると、彼もまた軽く頭を下げてきた。

「いや、助けに入るのが遅れて、むしろ責任を感じています。今回は監査ということで最初は伯爵家の屋敷に向かったのですが、肝心の伯爵夫妻があなたの孤児院にいるということで、慌てて向かったという次第でした」

「危機一髪で駆けつけてくださいましたわ。もう少し遅ければ、子どもたちはあの商人にさらわれていたでしょうから」

そのときのことを思い出すと、ぶるっと震えが走る。強気に対応していたモニカだが、海千山千の商人と対峙するのは、やはり怖かったし不安でいっぱいだった。

おまけに怪我もさせられたのだ。容赦なくモニカを蹴飛ばし足で押さえつけてきたあの商人のこ

とだから、モニカが抵抗し続ければ、今度は子どもたちを攻撃していた可能性もある。うるさいモニカを黙らせるために。

だから宰相ユリシス率いる王国騎士団が助けてくれたことは、本当にありがたかった。

――だが、人さらいから助けてもらえたからと言って、彼らが全面的な味方、というわけではないはずだ。

「あの、わたしの処遇はどうなるでしょう。叔父が容疑の通りのことをしていたなら、伯爵家はお家取り潰しも免れないと思います。わたしも一家の者として捕らえられるのでしょうか？　そうなったら、子どもたちはどうなるのでしょう」

モニカが気がかりなのは、自分の身より子どもたちのことだ。

彼らは亡きモニカの両親が、完全な善意で面倒を見ていた子どもたちだ。

両親は生前、慈善事業に熱心だった。孤児院のほかにも病院や、職にあぶれた者たちを積極的に雇用する工場などを建て運営していた。

両親の人柄と功績は領民たちに未だ慕われており、だからこそモニカは街に出るたびに多くのひとに声をかけてもらえる。

――案外、亡き前伯爵夫妻を惜しむ空気が強いからこそ、叔父夫婦はよけいに卑屈さを募らせて、関所にあらぬ干渉をして存在感を強めたかったのかもしれない。

（結果的に引っ立てられていったのだから、同情の余地はないけれど）

だが、叔父夫婦の愚行を見逃してきたのはモニカもまた一緒だ。病院や工場が閉鎖されても、未

来ある子どもたちだけはなんとか守りたい一心で面倒を見てきた。だが彼らのことで手一杯で、叔父夫婦に気を配る余裕はまったくなかったのだ。

これで孤児院まで閉鎖となったら、子どもたちはどうなってしまうのだろう。

不安な思いでうつむくモニカに、宰相は淡々と告げた。

「あなたの処遇に関しては、わたし自身が上に報告をすることになっています」

「宰相様の上……ということは、国王陛下に、ということでしょうか」

「そうなりますね」

ゴクリと唾を呑み込むモニカに対し、ユリシスは特に恐れ多さを感じていない様子で頷いた。

「あなたが現伯爵夫妻から冷遇されていたことは火を見るより明らかです。このあと街の人間からも聞き取りを行いますが、あなたがあの叔父夫婦に巻き込まれる形でしょっ引かれることは、おそらく領民の誰も望まないでしょう。もちろん、あなたを母と慕う子どもたちも」

不安な面持ちを隠せないモニカに、宰相は特に表情を変えずに告げた。

「わたしからは、あなたにはなんの非もないこと、むしろ伯爵家の援助なしで子どもたちを世話していた慈善意識の高い令嬢だと報告する予定です。――とはいえ、あなたの予想通り、伯爵位と伯爵家が持つ権限や財産などは、一時的に王家預かりとなるかと。少なくとも、あなたの叔父夫婦が裁判にかけられ、その結果が出るまではどうにもできないでしょうね」

「そうですよね」

そこは予想できるところだけに驚きはない。権限や財産が取り上げられたところで、両親亡きあ

との二年、モニカは孤児院の建物以外なにも持っていなかったから特段変わることもない。
「わたしがむしろ問題だと思うのは、子どもたちをさらおうとしていたあの商人です。ラガン商会の会長でしたか？」
「ええ、確かそう名乗っていたかと」
「ラガン商会もいろいろと……多くの噂を聞くところですが。商会とあなたの叔父が交わした契約書に関しては、王家や政府がどうこう言える類いのものではありません。契約書が偽装されたものであるなら話は別ですが、おそらくそうではないでしょうし」
「と、なると、借りたお金はやはり返さないといけないということですよね」
「ですね」
モニカは疲れの滲むため息をついた。
「わたしがラガン商会の会長さんに嫁ぐことで借金を帳消しにすると、叔父は会長さんと契約書を交わしたそうなのです。……逆に結婚すれば借金が消えるのだから、わたしはおとなしく嫁いだほうがいいのかも。子どもたちの安全さえどうにかなるのならば」
叔父よりだいぶ年上の男に嫁ぐのは嫌だが、貴族同士の結婚において年の差はさほど珍しいものではない。
平然と暴力を振るう男に嫁ぐのは恐怖でしかないが、借金を返せる当てがあるわけでもないし……そもそも叔父はどれくらいの借金をしていたのか……
と、モニカは口元に手をやって一人で悶々と考え込む。

そこへ、ユリシスが「んんっ」とまたわざとらしく咳払いしてきた。
「あ、すいません宰相様。なんでしょうか」
「いえ、借金返済のことで一つ提案があるのですが」
「はい？」
「その借金、わたしが個人的に肩代わりします」
さらっとした言い方だったため、モニカは一瞬、なにを言われたのか理解できなかった。
「……宰相様が借金を肩代わり!?　えっ、でも、いくらかわからないのに、そんな申し出……もしかしたら家が傾くようなとんでもない額かも」
そうだとしたら宰相もまた身の破滅だ、とモニカは真っ青になるが、彼は「大丈夫です」と肩をすくめる。
「こう見えてわたし、金持ちですので。宰相としての給金、領地からの収益、さらに母の実家のほうも多少面倒を見ているので、そちらからもいくらか。個人的に投資もしていて、すべて順調です。というわけで、下手な商人より資産は多く持っています」
「はぁ……」
「もちろん、タダで肩代わりするわけではありませんよ。わたし自身にも見返りがあります」
「なんでしょう。……もしや、『わたしと結婚しなさい』とおっしゃるおつもりですか？」
潔癖そうな宰相が、まさか子どもをさらおうとするような商人と同じことは言うまい、と冗談半分でモニカは彼に笑いかけるが。

「察しがいいですね。その通りです」
あっさり肯定されて、モニカはまたまたなにを言われたかわからなくなった。
「……本当ですか？　え、本気で、わたしと結婚したいと」
「はい」
「どうして」
モニカのもっともな問いかけに、彼は落ちてきた眼鏡を指先でちゃきっと上げた。
「宰相になってしまったからですね」
誇らしいというより面倒くさいという調子の彼に、モニカはパチパチと目を瞬かせた。
「次の宰相と目されていた人物が、就任間際に大病を患い療養に入ってしまったのです。相談役くらいなら務まるものの、宰相になるのは負担が大きいということで、当時の副宰相の中から、わたしが抜擢されました。早すぎる出世に周囲もわたしも仰天しましたが」
「宰相様はまだ二十代ですものね？」
「先月、二十五になりました」
二十五歳。王国の歴史上、最年少の宰相ではないだろうか？　それだけ優秀な人物なのだろうと思うが、当人としては重責を感じるところだろう。
「で、要職に就くと、即座に『結婚しろ』と周囲から急かされるわけです」
それもまた面倒くさいと思っている様子で、彼は少しため息をついた。
「とはいえ、しないことには周囲から圧力をかけ続けられることでしょう。年頃の令嬢の釣書も馬鹿みたいに積み上がっていきます。令嬢本人から、その親から、見合いや偶然を装っての出会いやハニートラップを仕掛けられることも増えるでしょう。というか、実際に増えました」
「大変ですね」
「まったくです。そこで、あなたと結婚したいと思った次第です」
「話がどうしてそこに着地するのか、不明なのですが」
こんな借金持ちで、ついでに孤児三十人付きの、どう見ても訳ありのモニカを選ぶ理由もわからないのだが。
「無論、理由があります。理由一つ目。花嫁を選ぶ際のわたしなりの基準として、まず並みの令嬢より健康、というより頑健であることが上げられます」
「頑健」
モニカは思わず自分の肘をぐいっと曲げてみる。どんなに力んでも力こぶは出てこない。
「失礼、頑健は言い過ぎでした。並みより丈夫、と言い直します」
「わたしは丈夫なほうですか？」
「伯爵家の屋敷を追い出されて二年、たった一人で三十人もの子どもの面倒を見ながら労働にいそしんでいらしたのです。並みの令嬢ならとっくに倒れて儚くなっていますよ」
そうだろうか？　……いや、そうかもしれない。子どもの頃は屋敷の敷地を抜け出し街中を走り回ることが日課だったし、長じてからは両親にくっついて孤児院や病院に向かい、そこの子どもたちと追いかけっこをして遊んでいた。その過程で知らないうちに体力が付いていたのだろう。

「やはり宰相の妻となると、通常の貴族夫人より人前に出る機会も多くなります。どこかに呼ばれることや家を代表することも。そういった行事を休みなくこなす体力は必須条件です」
「宰相夫人の素養に体力という条件があるとは」
「加えて社交もできれば、なおよしですが、リーダーになるよりは問題を起こさないことを重視していただいたほうが」
妻の評判は夫の評価に関わるから、そこは上手くやってくれというところか。
「理由二つ目。それなりに歴史があり、名家と言われる家の令嬢であること」
宰相の妻ともなれば、そのあたりも必須であろう。ステイレン伯爵家はバフィロー王国の貴族の中ではそこそこ長い歴史を持つし、両親が生きているあいだは、社交界でもそれなりの地位を築いていたと思う。……叔父夫婦がその評判をぶち壊してきた可能性が高いが。
「あなたの叔父夫婦の傍若無人ぶりは、社交界でも確かに悪目立ちしていました。ですがあなたは彼らの娘ではなく、人格者とたたえられた前伯爵夫妻の一人娘です。社交界に出て行けば、むしろ『苦労したでしょう』と同情を得られるはずです」
（そのあたりも織り込み済みなのね）
こうして求婚しているけれど、彼の中ではもうモニカを妻にすることは確定していて、その後の展開も予測し終えているみたいだ。切れ者でなければ務まらない宰相らしい見解である。
「そして、理由三つ目。二つ目を言ったあとで言いづらいのですが、『実家がそこまでの発言権を持たないこと』です」

確かに、名家なのに発言権がないというのは考えにくい。それなりの家格の人間は特別な役職に就いていなくても、言動に影響力を有するのが普通だ。
「その点、ステイレン伯爵家はこの二年で没落寸前なわけですしね」
「申し訳ないがその通りです。その上で今回のお家取り潰し……とまで行かないとしても、相応の罰はあるわけで。社交界でも政界でもしばらく影響力はなくなるでしょう」
宰相も神妙な面持ちで頷いた。
「宰相となったからには、実現したいと思っていた政策に全力で取り組みたい。それに対し義両親から『娘の実家だから～』という理由で、横からケチを付けられるのは我慢なりません」
（そういうことね）
モニカは深く頷く。これまでの会話から推測するに、目の前の彼は一度こうと決めたことにあれこれ言われるのを、蛇蝎のごとく嫌う傾向にありそうだ。
「妻の実家にはそれなりの格を持っていてほしいですが、その力を行使してほしくはないのです。ぶっちゃけ、こちらには関わらないでいただきたい。あなたの実家は、よけいなことを口出ししてくる人間が存在しなくなったという意味では最高の家です」
「そうですね」
「というわけで、わたしにとってあなたは理想の花嫁というわけです。ご理解いただけましたか？」
「それこそ、わたしの借金を肩代わりしてもいいと思えるほどに、理想的というわけですか」
「そうです」

――モニカとしては、理想的というより、都合がいいというふうに受け取れたが。
（いいえ、相手のことをとやかく言う権利はわたしにはないわ）
叔父たちが作った借金を肩代わりしてくれるというのだ。その条件が同じ「結婚」であるなら、あのあくどそうな商人より、宰相閣下のほうがよほど信頼に値する。
「……わたしが気になるのは子どもたちのことです。あの商人のように国外に売り払うことはなくても、今より劣悪な環境に追いやることは決して許容できません」
そこだけははっきりさせたいと視線でも強く訴えると、彼は「無論です」と理解を見せた。
「そこで提案ですが、結婚後は彼らもあなたと一緒に、我が家が所有する王都のほうの屋敷に移ってもらうのはどうでしょう」
「えっ……宰相家のお屋敷に、ですか？」
ありがたい話ではあるが……貴族が持つ『王都の屋敷』というのは、たいてい、議会が開かれる社交シーズンを過ごすためにある邸宅のことだ。そのため、領地の屋敷に比べてこぢんまりしていることが多い。
無論、家格によっては本当に大きな家もあるが、三十人もの子どもを受け入れられる環境があるとは考えづらい。
そんなモニカの不安を表情から読み取ったのだろう。ユリシスは「ご心配なく」と付け足した。
「見栄を張りたかったのかわかりませんが、我が家の先祖は郊外の土地を買ったのですよ。郊外と言っても、馬車で二十分もあれば王城に到着できる距離ですけどね」

「郊外、ですか」
……そういえば。確か、古くからある王国の名家は、一等地ではなく、あえて王都から少し外れたところに広大な土地を買って、そこに屋敷を構えると聞いたことがあった気がする。
（つまり、目の前にいるお方は宰相というだけでなく、王国でも有数の名家のご当主ということ……!?）
今さらながらそれに気づいてさーっと青くなるモニカだが、ユリシスは特に誇る様子もなく淡々と語った。
「敷地内には狩りができる森や、ピクニックに最適な泉もあります。子どもたちがのびのび過ごすには最適な環境かと思います」
「ま、まぁ……それは、すごいですね」
「麦畑、野菜畑はもちろん、馬場もあり、馬、羊、山羊、牛も飼っています。子どもが三十人もいるなら畑も家畜も増やしますから、そのぶん働き手も必要になる。子どもたちにその手伝いをお願いできれば、将来的な職業訓練にもなるでしょう」
「それはそれは……」
願ったり叶ったりの素晴らしい環境だ。両親が生きていた頃は職業訓練も行っていたが、ここ二年はそういったものはまったくできなかっただけに、より魅力的に思えてくる。
「住み込みの使用人の子どもたちも同じように過ごしています。彼らに交ざって簡単な労働と、読み書き、計算の授業も受けてもらいましょう。将来的には我が家の使用人になるのもよし、他家に

奉公に出るのもよし、より高度な勉学に挑むのもよし。どれを選んでも紹介状や推薦状を書く予定です」

「他家に働きに出ることも可能なのですか？」

モニカはひどく驚いた。普通、使用人の子どもは他家に働きに出ることはそうそうない。

貴族の家に仕えるなら親と同じ家に仕える。それが暗黙の了解だし、そもそも貴族は使用人がよその家に働きに出ることを嫌うのだ。新たに居着いた場所で、自分たちをどう噂されるかわかったものではないだけに。

「視野を広げることは大切ですから。いったん外に出ても戻ってくる者も多くいますし、そういった者を差別することはありません」

「寛大なのですね」

「というより、彼らの私生活に興味がないだけです。給金をしっかり払い、サボっていないかたまに監視するだけで、たいていの人間はそこそこ動きますから」

「……」

それは少し冷たい言い方である気がするが……多忙な宰相閣下にとっては使用人の存在など、その程度になるのは仕方ないのかもしれない。

（そのぶん、奥方となったひとが奥向きを気にかければいいわけだし）

そして今のところ、彼はその役目をモニカに頼みたいと思っている。

（……）

少し考えたモニカは、ゆっくり顔を上げた。

「家を失い、借金の返済もできないわたしにとっては、ここであなた様の求婚に頷いておくのが最善だとわかっています」

「ご理解いただけて嬉しいです」

「でも、本当にわたしでよろしいのですか？　今言った三つの理由、当てはまる令嬢はほかにもいらっしゃると思いますし、子ども三十人は……やはり大きな負担ですよ？」

モニカのような訳あり娘を、わざわざ選ばなくてもいいと思うのだが。

だが宰相は揺るぎない瞳で、モニカを見つめてきた。

「あなたがいいのです。あなたでなければ駄目です」

あまりにきっぱり言われて、モニカは面食らう。眼鏡越しにこちらをジッと見つめる青の瞳はあまりにまっすぐで、モニカは不覚にも呑まれてしまった。

「……わ、わかりました。わたしでよろしければ、求婚をお受けいたします」

思わず引き攣った声で答えると、目の前の宰相は眼鏡をちゃきっと上げて頷いた。

「ありがとうございます、モニカ嬢。あなたを一生大切にします」

思いがけず熱烈な台詞を贈られた。一生大切に……なんて、彼のような人間には不似合いな言葉に聞こえるが。

（きっと社交辞令よね）

いくらモニカが都合のいい令嬢だとしても、しょっ引かれた叔父夫婦と借金、子ども三十人を背

負っているのだ。条件としてはおそらく最悪の部類のはず。
以前から仕えてくれている使用人たちに対してもドライな対応をする彼なのだから、花嫁に対しても形式的に対応しているだけだろう。
とはいえ、子どもたちごと庇護を受けられる場所を得られたことは間違いない。
彼のほうは自分に関心がなくても、自分はこの恩を一生のものとして大切にしていこう。
都合のいい花嫁。よいではないか。彼の望む花嫁になることが恩返しになるなら、いくらでもなってやろう。
（頑張らなくっちゃ）
二年前、叔父夫婦に伯爵家の屋敷を追い出され、身一つで孤児院に身を寄せたことが思い出される。あのときも今のように頑張ろうと決意したのだ。自分を頼ってくれる子どもたちのためなら、なんでもやってやるぞと。
今も同じだ。子どもたちのために、借金を肩代わりしてくれたユリシスのために、頑張って生きていこう。
強く決意したモニカだが、いろいろあって疲れていたのだろう。ユリシスが出て行くと眠気が押し寄せてきて、そのままパタリと寝入ってしまった。

ユリシスが予言した通り、一晩ぐっすり眠った翌日には身体のあちこちに痛みが出てきた。
特に捻挫した右足首の痛みはひどく、痛み止めを飲まないと動けない有様だった。

「うう、申し訳ありません……」
情けなさと恥ずかしさで真っ赤になるモニカに、彼女を昨日と同様に横抱きに抱えたユリシスは「なんのことはありません」と淡々と答えた。
時刻はもうすぐ昼になる頃だ。子どもたちも疲れと興奮からか、ある子は早すぎる時間に起き、ある子は今になって起きたりとまちまちだった。
モニカはいつもの時間に起きたはいいが痛みで動けず、朝食も着替えも女性職員の補助が必要だった。なんとか落ち着いた頃、街に出ていたユリシスが帰ってきたので、抱きかかえられて一階の食堂へと降りていくところだった。
食堂には子どもたちが集められており、モニカが出て行くと全員がわっ、と声を上げた。
「モニカ・ママ！　大丈夫？」
「ええ、大丈夫よ」
本当は膝も腰も痛いが、これ以上は心配をかけるまいとモニカは明るく振る舞った。
ユリシスは手近な椅子にモニカを下ろすと、子どもたちをぐるりと見回して告げる。
「昨夜のうちにモニカ嬢と話し合って、皆も彼女とともに引っ越しをすることに決定しました。これから孤児院に戻るので、全員で荷物をまとめてください」
「えっ、引っ越し⁉」
寝耳に水という感じで子どもたちがざわつき始める。中には「孤児院はあの怖い男のひとたちのものになっちゃうの？」と、不安そうな顔をする子もいた。

「ええとね、いろいろと事情があるんだけど。お引っ越し先は、この宰相様のお屋敷です。孤児院より広くて、畑があって、そう、馬や牛もたくさんいるのですって」
「えっ！　馬がいるの？」
「見たい見たい！」
少し興味をそそられた様子の子どもたちに、モニカはにっこりとほほ笑んだ。
「わたしも早く見たくてうずうずしているの。孤児院に戻ったらすぐに持ち物をまとめてね」
「はーい！」
というわけで、その後は昨日と同様の大きな馬車に乗り込み、全員で孤児院に移動する。
昨日の騒動のあと、宰相は騎士を二人ほど孤児院に残してくれていたらしい。馬車が停まると玄関を内側から開けて、子どもたちを迎え入れてくれた。
「見張りご苦労。変わったことは？」
モニカを横抱きに抱えたユリシスが問いかけると、敬礼した騎士はキビキビと報告した。
「はっ！　夜にラガン商会の者が事情を聞きに訪ねてきました。今朝方もやってきましたが、会長は任意で事情聴取中ということで追い返しました」
「そうか。わかった」
宰相はそのまま屋敷に入る。抱えられるモニカは不安になって尋ねた。
「あの会長さんが、宰相様に借金を肩代わりしてもらうことを受け入れない可能性はありませんか？」

「可能性の話ならもちろんあるでしょう。ですが、そこは受け入れさせますよ。心配しないでください」
宰相である彼がそう言うのだから、きっと大丈夫だろう。というかモニカの立場では大丈夫だと信じるしかない。
「なんだかわたしのせいで、いろいろご迷惑をおかけしている気がします」
「そうですか？」
「そうですよ。今もこうして抱っこしてもらっていますし」
すると宰相は、眼鏡の奥で大きく目を見開いた。
「なにか？」
「いえ。抱っこ、という表現が新鮮だなと思いまして」
「あ」
孤児院にいるあいだは常に誰かしらを抱っこかおんぶしていたから、ついその言い方をしてしまった。
「す、すいません。宰相様に向かって不適切な言葉を……」
「いえ。あなたがいかに毎日頑張っていたのかが垣間見られた思いです」
無表情のまましれっと言われるが、きっと子どもっぽいとあきれられたことだろう。こんなことで宰相の妻が務まるのか、とモニカは心配になってくる。
そんな中、あとからやってきた大きな馬車が玄関前に停まって、子どもたちが「お引っ越し、お

引っ越し」と歌いながら降りてきた。
「では皆さん、今から騎士が麻袋を配るので、着替えや大切なものをそこに入れてください。大きなおもちゃや絵本は騎士が運び出すので、自分のものだけ袋に入れてくださいね」
「はーい！」
子どもたちは袋を手にすぐに部屋に入っていく。騎士たちも大部屋に入り、荷物を運び出してくれた。
モニカも宰相に抱かれた状態で階段を上がり、私室へ入る。
寝るために過ごしていた部屋なので、私物は本当に少ない。宰相には机周りの品をまとめるようにお願いして、モニカは自分の衣装棚を開いた。
「衣服は、ドレスはもちろん、下着や靴、帽子も新しいものを用意しています。なので、当面必要な着替えだけ持っていけば大丈夫ですから」
女性の衣装棚をのぞくのはいけないと思ったのか、こちらに背を向けながらユリシスが声をかけてくる。
ちょうど古びたドレスを三着手に取っていたモニカは「そうですね」と言いつつ、持っていこうか捨てようか悩んでしまった。
「なにか思い出の衣装なのですか？　ずいぶん古いようですが」
モニカの手が止まっているのを察してか、半身だけ振り返った宰相が尋ねてくる。
「ええ。もう捨てるべきだと思うのですが……母の娘時代のドレスなので、捨てがたくて」

今となっては母の唯一の形見でもあるドレスは、叔父夫婦に追い出されたとき、なんとか持ち出したものだ。
叔父夫婦は仕立てたばかりのドレスは『売ればお金になる』とすべて取り上げたが、二十年以上前に仕立てたというこのドレスは、さすがにいらないと判断したらしい。裏庭の焼却炉に捨てられていたところを偶然見つけて回収できたのだ。
とはいえ、もともと古かった上に焼却炉に入れられていたので、見た目はかなりボロボロだ。
宰相の家に持っていくのはさすがに……と思ったが、ユリシスはすぐにドレスを受け取った。
「持っていきましょう」
「でも」
「こちらの紙をいただきますね」
衣装棚の下部にしまっていた油紙を取り出して、宰相はドレスを丁寧に梱包してくれる。その様子を見て、モニカは胸が温かくなるのを感じた。
モニカはもちろん子どもたちも私物は少ないので、一時間もせずに引っ越しの準備は整った。
何人かが慣れ親しんだ場所を離れることに不安になり泣き出したりしたが、ユリシスも騎士たちも「そうなるのも当然だろう」と温かく見守ってくれていたのが印象的だった。
なんとか子どもたちをなだめて馬車に乗せたモニカは、彼らに「お待たせしてすみません」と頭を下げる。
騎士たちが大丈夫だと寛大にほほ笑む中、ユリシスも真面目な面持ちを崩さず頷いていた。

「わたし自身も幼い頃に住まいが大きく変わった経験があるので、子どもたちの寄る辺ない気持ちも少しはわかるつもりです。まぁ、わかったところで、引っ越しはやめませんがね」
最後にいたずらっぽく付け足したのは、彼なりのユーモアだろうか。モニカはくすりとほほ笑み、もう一度頭を下げた。
「さて、あなた方について屋敷まで行きたいのですが、まだ聞き取りが残っています。あのラガン商会の会長にも契約書の確認をしなければ。というわけで、屋敷までは騎士の半分を護衛と世話役として就けますので」
「あ、そうなのですね」
てっきり一緒に屋敷に向かうのだと思っていたモニカは面食らうが、彼の立場を考えれば当然のことだろう。
なんだか急に心細くなるが、モニカは意識的に口角を引き上げる。
「なにからなにまで、ありがとうございます。お屋敷でお待ちしていますね」
ユリシスは一つ頷き、階段に腰掛けていたモニカをひょいっとまた抱え上げた。
「馬車までは抱っこさせてくださいね」
「あら、その言い方――」
「あなたの言葉が可愛くて、つい使いたくなりましたが、うん、わたしが使っても可愛くはないですね」
大真面目な顔で告げる宰相に、抱えられたモニカは思わず噴き出してしまう。

そうして馬車に乗せられると、ユリシスはモニカの手を取って甲にそっと口づけてきた。不意打ちのような口づけに、モニカは息を呑んで固まってしまう。
「では、またあとで」
黙礼したユリシスはすぐに馬車を出て、御者や騎士たちに全員をしっかり運ぶよう命じる。
馬車の扉が外から閉められ、ハッと我に返ったモニカは慌てて窓を開けた。
「あの、ありがとうございました――」
走り出した馬車の音に負けない声でユリシスに叫ぶ。
彼は一つ頷き、モニカの馬車が玄関アプローチを出るまで見送ってくれていた。モニカも大きく手を振り返す。馬車が角を曲がって宰相の姿が見えなくなると、なんとなくさみしい気持ちが胸に広がった。
ついつい、彼が口づけてくれた手の甲に目が行く。挨拶のキスだとわかっているが、異性にあんなふうに口づけられたのが初めてのせいだろうか？　どうにも胸がドキドキして、頬が勝手に熱くなっていくような気がした。

ユリシスの屋敷がある王都近郊までは五日の旅路だ。馬を飛ばせば二日で到着する距離だが、子どもが三十人もいるのだ。予定通りには絶対にいかない。実際に移動中でも取っ組み合いのケンカが起きて、泣き出す子もいたほどだ。
そんな子たちを離すために、子どもたち用の大きな馬車からモニカの乗る馬車に、交代で何人か

を招くことにした。すると子どもたちはほかの子の目がないのをいいことに甘えたり、あるいは不安な思いを話してくれたりすることが多くなった。

「なぁ、モニカ・ママ。あの宰相サマと結婚するって騎士たちから聞いたけど、本当？」

「わたしたちを世話してもらうために、無理やりお嫁さんにされるとかじゃないよね？」

中でも、年長の何人かは、自分たちの今後よりモニカの身を案じていた。確認のように何度も聞かれて、モニカもつい苦笑してしまう。

「うーん、そうね。宰相様と結婚するのは本当よ。叔父様たちが作った借金の肩代わりをする代わりに、結婚してほしいと言われたの」

下手に隠したり誤魔化したりしても、バレたときが怖い。子どもは意外と鋭いのだ。モニカはあえて軽い調子で答えた。

当然、子どもたちは「マジかよ!?」とショックを受けた顔をする。

「っていうか、借金って……。もしかしてガタイのいいあの男たちが襲ってきたとき、おれたちってさらわれそうになってたのか？　どっかに売られるところだったとか？」

「じゃあモニカ・ママは、わたしたちを助けるために結婚を決めたっていうの？」

自分たちのせいで、と青い顔をする子どもたちに、モニカは「違うわ」ときっぱり告げた。

「わたし自身が、それが一番いいと思ったからなのよ。あなたたちの生活の保障ももちろん大切だったけど、それ以上に、わたし自身も宰相様との結婚がもっとも安心で安全だと思ったの」

自分には借金の返済能力はないし、叔父夫婦が不正を起こしてしょっ引かれたので、家も潰れるだろう。

後ろ盾のない未婚の貴族令嬢がたどる道など、たかが知れているのだ。むしろ嫁ぎ先があること自体が奇跡に等しい。

「宰相様のほうも早急に結婚したい事情があったのですって。お互いに利益のある結婚だから、あなたたちが責任を感じることはいっさいないのよ」

「利益って、そんな仕事みたいな言い方――」

「あら、貴族の結婚なんてこんなものよ。親同士が勝手に話をまとめて、それまで会ったことのないひととその日のうちに婚約、ということも珍しくはないのだから」

……とはいえ、ラガン商会の会長のような暴力男は願い下げではあるし、叔父たちが彼を連れてきたことは腹立たしいばかりだが。

「大丈夫よ。宰相様はとても親切にしてくださっているわ。きっといい結婚生活になるわよ」

「それならいいけど……。でも、孤児院にいるあいだ、宰相様ったらモニカ・ママのことをずっと抱っこしていたわよね？」

「確かに。うーん、それなら信頼してもいいのかな？　モニカ・ママのこと大切にしてくれるなら、別に文句はないんだけど」

子どもたちは真剣な表情で考え込んでいる。自分が彼らを大切に思っているように、彼らも自分を大切に思ってくれているのだとわかって、モニカはジーンと感動してしまった。

「きっと大丈夫よ。……もしどうにもならなかったら、そのときはそのときで、また考えることに

しましょう」

そうならないことを祈るばかりだが、未来がどうなるかはわからない。

平穏な毎日が続くと思っていたのに、たった一つの出来事ですべてがひっくり返るということを、モニカは二年前に体験している。

馬車の事故で、両親ともに即死したあの日。あの日からモニカの人生は一変した。十六歳の伯爵令嬢は叔父夫婦に屋敷を追い出され、三十人の孤児を一手に引き受ける身となった。

そして先日もまた人生が一変した。叔父夫婦の不正、借金、誘拐未遂。怖い思いをして、そこから助かったと思ったら、予想外の求婚。

人生はいつどこで、どうひっくり返るかわからない。

自分が大変な目に遭ってきたからこそ、孤児という、ただでさえ大変な運命を抱えている子どもたちには、これ以上の苦労なく幸せになってほしい。

（そのためには、宰相様の望む妻でいなくてはいけないわね）

努力を惜しむつもりはない。モニカは五日間の道中、足が不自由な中でもできる限りで子どもたちの面倒を見て、彼らが不安を感じないよう努めたのだった。

＊　＊

そうして五日後。到着したユリシス宰相の屋敷は――大きかった。

立ち読みサンプル
はここまで

「ふわぁ……。小さい頃に遊びに行った、スティレン伯爵家のお屋敷より大きいわね」

年長の子どもたちが屋敷を見上げながら、感心した面持ちで言う。モニカも首を反らして上を見ながら「本当ねぇ」と頷いていた。

王都郊外に建つユリシス宰相の屋敷は、母屋となる建物のほかにも、使用人たちが住まう棟や私兵が住む棟もあるという巨大さだった。そもそも馬車で入ってきた門から母屋までの距離も相当なもので、どこが敷地の端なのか、中に入ってしまうとわからないくらい広大だった。

「ようこそおいでくださいました、モニカ・スティレン様。主人より話は伺っております。どうぞ、こちらへ」

老齢の家令がモニカたちを出迎えてくれて、ひとまず広間に通された。床には絨毯（じゅうたん）のほかに厚手のラグが敷かれて、子どもたちが靴を脱いで過ごせるように工夫されていた。

「足を怪我しておいでと伺っておりますが、車椅子のご用意は大丈夫でしょうか？」

「ええ。この通り、杖をつけば歩ける程度に回復しましたので。お気遣いありがとうございます」

「とんでもございません。それにモニカ様は当家の奥方となられるのですから、家令であるわたしには気安くお話しくださいませ」

家令は穏やかな雰囲気で、さっそくはしゃぎ出す子どもたちのこともニコニコと楽しそうに見つめていた。

到着したのが昼過ぎだったので、全員がお茶とお菓子を振る舞われホッと一息つく頃には、そろそろ夕方という時間になっていた。